連載

農村生活のすすめ

第８回：対馬における「しまづくり」についてのすこし長いコラム

主席研究員　川井　真

目　次

１．はじめに～出会い
２．地方創生とまちづくり
３．「防人プロジェクト」始動！
４．対馬という国境の島
５．いにしえの対馬
６．対馬の暮らし
７．おわりに
～パラダイム転換への道筋

１．はじめに～出会い

いくつかの運命的な出会いも重なって、昨年から長崎県の離島をたびたび訪問するようになりました。ことのはじまりは「対馬は日本にとって、とても重要な場所です」という中沢新一先生[1]の一言でしたが、それ以来、対馬という場所への関心はどんどん膨らんでいきました。これまで数年にわたり、「永続的な地域社会づくり」という複雑かつスケールの大きな研究に取り組んできましたが、その過程で積み残してきた――確信の持てる答えを得られなかった――課題がいくつかあります。その難題を解く鍵が、対馬にあるような気がしたのです。そこで昨年の夏、正確には平成26年７月27日のことになりますが、数人の仲間と一緒に、対馬という国境の島におり立ったのです（**写真１**）。現地では、対馬市しまづくり戦略本部の前田剛さん、そして福岡大学経済学部の阿比留正弘教授のはからいもあって、わたしたちの来島を歓迎する意見交換会と懇親会が、島の北部の上県町佐護（かみあがたまち さご）にある友谷地区集会所で開催されることになりました（**次頁写真２・３**）。そのおかげで、わずか２泊３日の対馬滞在であったにもかかわらず、対馬市の財部能成市長やＪＡ対馬の桐谷安博組合長、対馬いづはら病院（現・長崎県対馬病院）の川上眞寿弘院長をはじめ、対馬を愛する多くの人々とお会いすることができました。この訪問をきっかけに島の皆様との

写真１　国境の島・対馬（筆者撮影）

1　明治大学野生の科学研究所所長。宗教、哲学、芸術から科学まで、あらゆる領域に思考を展開する思想家であり人類学者。『アースダイバー』『野生の科学』『僕の叔父さん 網野善彦』『日本の大転換』『チベットのモーツァルト』『森のバロック』『吉本隆明の経済学』など著書多数。三河における共同研究報告「農業と女性―ＪＡ愛知東女性部の活動と組織原理―」を『共済総合研究』Vol. 70（2015年３月）に掲載。

写真２　意見交換会

写真３　懇親会

交流が始まり、気がつけば、対馬市の「しまづくり」にも積極的に参加することになっていたのでした。

２．地方創生とまちづくり

おりしも昨年は国の政策に「地方創生」が掲げられ、年末には「まち・ひと・しごと創生法」が施行されるなど、農山漁村地域にふたたび注目が集まるようになった年でもあります。しかし、このような国家プロジェクトとは一線を画し、わたしたちの活動は、地域力と人間力を最大限に引き出すことによる農山漁村の暮らしの再生、すなわち歴史や風土を重んじながら、そこに暮らす人々が知恵を出し合い、主体的な行動と協働によって豊かな未来を創造する、そのような住民本位の等身大の生活基盤づくりを支援していくことが目的です。

わたしたちが目指すのは、市役所を中心にＪＡ、漁協、森林組合などが――たとえば安心して暮らし続けることのできる「しまづくり」というような――合目的的な協力関係を結び、島民の主体的な参加を促しながら、島民の、島民による、島民のための生活基盤づくりという取り組みを具現化していくことです。具体的には、島の主要産業である農林漁業を核とする高次の産業ネットワークを構成して新たなサービス産業や雇用機会を生みだし、そこにUJIターン[2]の受け入れ環境を整備することで、高齢化リスクを低減しながら経済の内発的発展を促進していくことや、離島における地域包括ケア・システムのモデルとなるような仕組みを住民参加型のオープン・システムでつくりあげること、さらには自然環境と調和する新しいエネルギー生産構造へと徐々にシフトして、いずれはエネルギーの地産地消を実現することなどです。すなわち、それは対馬の自然や風土を大切にしながら、島民が協力し合って島の内部に共通価値を創造していくための活動であり、まさしく自然と人間の協働による永続的な「しまづくり」の実現なのです。

2　出身地へと戻るUターン、出身地の近くのまちに移住するＪターン、出身地以外の地域へと移住するＩターンなど、地方移住の動きを総称したもの。

３．「防人（さきもり）プロジェクト」始動！

わたしたちは、このような対馬の内発的発展を目指す実践的な共同研究に、「防人プロジェクト」と名付け、今年から本格的な活動を開始しました。本プロジェクトを推進するメンバーは、ＪＡ共済総合研究所において「食・エネルギー・ケアを基盤とする農山漁村地域の内発的発展モデルに関する研究」に携わる研究者、上述した中沢新一先生と明治大学野生の科学研究所のスタッフ、そして川原尚行先生[3]と国際NGOロシナンテスのスタッフです。じつは最初に対馬を訪れた際の「数人の仲間」というのは、この中沢先生、川原先生、そして明治大学野生の科学研究所の野沢なつみさんでした。さらに、共通の理念をもち、持続可能な社会の姿を追い求める多くの実践者や専門家にも、必要に応じて、本プロジェクトの推進に協力していただくことにしています。また東京大学高齢社会総合研究機構の辻哲夫先生には、対馬市が地域包括ケア計画策定のために設置した「対馬における地域包括ケア・システムのあり方検討委員会」の顧問にご就任いただき、対馬市の「しまづくり」とプロジェクトの活動を、医療・介護政策とジェロントロジー（老年学）の観点から積極的に支援していただくことになりました。

プロジェクトの構成メンバーは多種多様ですが、それぞれが役割を認識し、個々の判断で自由に行動し、対馬の人々と協働しながら計画を進めていきます。基本的にお互いの活動を拘束したり、制限したりはしません。なぜなら、本プロジェクトのメンバーは皆、事前に大きな方向性を確認し合い、それぞれが有する理想や思想や信念への信頼をもとに活動しているからです。もちろん定例会議で今後の活動計画を話し合ったり、定期的に研究会を開催して研究報告を行ったり、それぞれの進捗状況を共有しながら必要に応じて協力体制を組んだりはします。しかし基本的には、対馬で生きる人々に寄り添いながら、各研究者や実践者が独自の判断で役割を遂行していくようなスタイルを選択しています。なぜなら「しまづくり」のような複雑系のプロジェクトは、オープン・システムの学際的で実践的な共同研究が望ましいと考えるからです。いずれにしても、「しまづくり」の主役は島民なのです。

４．対馬という国境の島

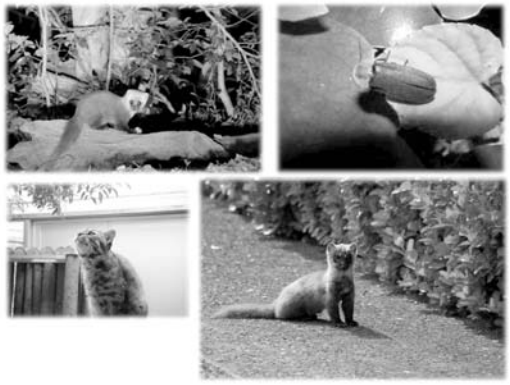
対馬は玄界灘に浮かぶ長崎県の離島で、九州の最北部に位置しています（**図１**）。気候は、東シナ海と日本海をつなぐ対馬海流（暖流）

図１　対馬の位置

3　認定NPO・国際NGOロシナンテス理事長。外科医。九州大学大学院修了後に外務省入省。2002年在スーダン日本大使館へ医務官兼一等書記官として赴任するも、様々な疑問を感じて2005年１月に外務省を退職。同年４月より単身スーダンにて医療活動を開始した。詳細は『共済総研レポート』（2014年６月）「人間と農業についてのすこし長いコラム」を参照。

の影響を受けて比較的温暖ですが、海洋性気候のため雨が多く、冬場は大陸からの強い季節風により寒さが厳しくなります。島の約89％は山林で、標高200mから300mほどの山々が連なり、海岸線までのびています。上島と下島をつなぐ中央部には日本のリアス式海岸の名所でもある浅茅湾（あそうわん）があり、壱岐対馬国定公園に指定されています。

野生生物には、ツシマヤマネコやツシマテン、アキマドボタルなどの大陸系の生物が確認され、対馬特有の生態系が構成されています（**写真４・５**）。四方を海に囲まれた離島で、内陸は険しい山々が連なる地形でもあることから、島内での人の移動も制限されていたのか、自然や、伝来した文化の多くが、悠久のときをこえて原形のまま保存されています。その痕跡は食文化にも表れています。たとえば、縄文時代の後期に伝来したとされる「そば」ですが、対馬では品種改良がなされることなく、縄文時代の原種といわれる「対州そば」を味わうことができます（**写真６**）。また、いまも蜂洞（はちどう）という伝統的な養蜂が島の至るところで確認され、野生のニホンミツバチと共生する生活が営まれています（**写真７**）。



対馬市及び対馬野生生物保護センター

写真４　対馬に住む野生生物

写真６　対州そば（そば粉、種）

対馬野生生物保護センター

写真５　ツシマヤマネコ

写真７　蜂洞

対馬は九州本土から約132km、朝鮮半島までは約49.5kmという地点にあり、古来、日本とユーラシア大陸との中継地として、文化・経済交流の重要な拠点になってきました。歴史的な観点では、稲作技術や漢字や仏教、あるいは青銅器などの大陸文化が流れ込んできた日本の玄関口であり、今日においても朝鮮半島との人の往来や文化交流が活発に行われています。

５．いにしえの対馬

対馬を巡ると多くの神々に出会うことができます。はじめて対馬を訪れたとき、対馬空港から上県町佐護の友谷地区集会所に向かう途中、龍宮伝説の残る「和多都美神社（わたつみじんじゃ）」に立ち寄りました。浅茅湾の奥の北岸に位置し、神話にも登場する彦火火出見尊（ひこほほでみのみこと）＝山幸彦と豊玉姫命（とよたまひめのみこと）を祭る海宮で、本殿から海に向かって５つの鳥居が連なり、そのうち２つは海中にあって、潮の動きで様々な表情を見せる神秘的な神社です（**写真８・９**）。神話では、兄の海幸彦に借りた釣り針をなくした山幸彦が、途方に暮れながら釣り針を探す旅に出ますが、この場所で海神の娘の豊玉姫と出会い、ともに暮らしたとされています。境内には磯良（いそら）といわれる鱗状の磐座（いわくら）を囲む３本足の鳥居があり（**写真10・11**）、いにしえの時代、この場所でなんらかの祭祀の儀式が行われていた

写真８　和多都美神社

写真10　磯良

写真９　海中の鳥居

写真11　磯良恵比須

であろうことがわかります。境内の横から裏参道を進むと「豊玉姫の墳墓」といわれる磐座があり、近づくにつれて、そこが神聖な場所であることを周囲の空気が教えてくれます（**写真12**）。

初回訪問の最終日には、すこし回り道をして、対馬南西端の厳原町豆酘にある天道信仰の聖地とされる多久頭魂神社に参拝しました（**写真13**）。当該神社の北に位置する龍良山南面の浅藻地区には八丁角と呼ばれる天道法師の墓所があり、また北面の山中には、天道法師の母の墓所とされる裏八丁角があります。まさに龍良山全体が天道信仰の聖地とみなされていて、そこは立ち入ることの許されないアジール（聖域）として、古くから「オソロシドコロ」と呼ばれていました。天道法師にまつわる伝説は、虚船に乗って対馬南部の豆酘都内院村に漂着した高貴な女性が、太陽に感精して出産し、それが太陽の子すなわち「お天道様」であったというものです。お天道様すなわち天道法師は嵐をまとって天空を飛行することができたので、空を飛んで都に向かい天皇の病を癒したと伝えられています。また多久頭魂神社には古代神道である「赤米神事」の習俗が残っていて、豆酘という地区では神事に用いる古代米の赤米が、いまも神田で栽培されています（**写真14・15**）。さらに豆酘では、古代に吉凶を占ったとされる

写真12　豊玉姫の墳墓

写真13　多久頭魂神社

写真14　赤米神田

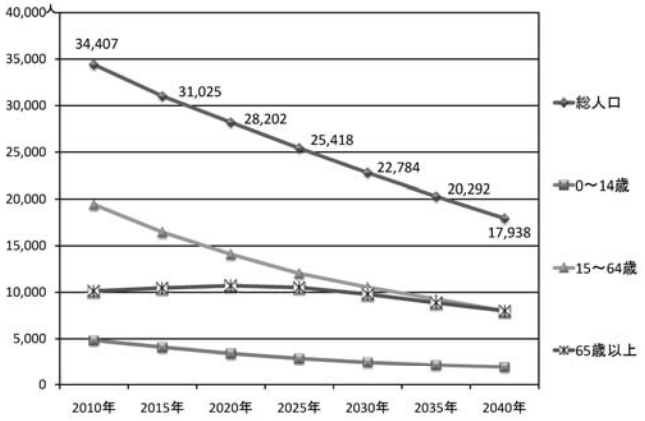
写真15　神田の風景

亀卜（きぼく）の習俗なども現代に受け継がれています。

悠久のときをこえて語り継がれてきた神話の世界は、因果連鎖を形成するように島全体へと張り巡らされていき、島の風土に深く根をおろしていったのではないかと思います。いにしえの壮大な物語は島の暮らしの中にとけこみ、島民の誇りと豊かな精神世界をつくり出しています。

６．対馬の暮らし

では、対馬の社会経済と今後の推移を概観してみましょう。まずは島の人口動態を見てみると、平成27年４月末現在の島の人口は男性が16,041人、女性が16,682人であり、合計32,723人になります。じつは対馬の人口はすでに昭和30年代から減少傾向にあり、昭和35（1960）年の国勢調査では総人口は69,556人でしたが、それ以降は徐々に減少を続け、現在に至っています。また対馬も例に漏れず、今後ますます高齢化が進行していきます。人口動態の将来推計では、2040年には対馬の総人口は２万人を下回るものとみられていますが、問題なのは、総人口と生産年齢人口すなわち15歳から65歳までの人口の減少が類似した傾向を示していることです。その一方で、65歳以上の人口変化は小さく、総人口に占める高齢者の割合が相対的に高まっていきます（**図２**）。これは高齢化する地域の一般的な構造変化のようにも見えますが、すこし進行が速いのです。このような人口変動の要因にはいくつかの理由が考えられますが、とりわけ産業が衰退していく地域に特有の現象であるともいえます。対馬市の合計特殊出生率は、



国立社会保障・人口問題研究所：『日本の地域別将来推計人口』（平成25（2013）年３月推計）

図２　対馬市の人口［将来推計］

厚生労働省が公開する「平成20年～平成24年人口動態保健所・市区町村別統計」によると2.18で、全国的にも出生率の高い市区町村ランキングの第５位に入っています。人口を維持するために必要な2.0という数値を上回っているにもかかわらず、なおも人口が減少していく背景には、算出の基礎となる母数すなわち出産年齢にある男女の人数が減っていることだけではなく、人口の社会減[4]に歯止めがかからなくなっていることが予想されます。これは対馬市にとっても頭の痛い問題でしょう。

対馬の場合は自然資源が豊富であることに加え、かなり以前から人口規模も縮小傾向にあったことなどから、生活に必要な、人間が生きていくために必要な物資を内部調達できる環境が維持されてきたものと思われます。島の暮らしのなかには文化としての贈与経済や交換経済がいまもなお脈々と息づいていますから、都市生活とは異なり、生きていくこ

4　人口の自然増減は「出生数－死亡数」によって算出するが、社会増減は「転入数－転出数」により算出される。対馬の人口は、この社会減の影響を強く受けているものと思われる。

とへの先の見えない不安のようなものを感じている人は、たしかに少ないのかもしれません。したがって高齢者にとっても暮らしやすい環境が整っています。しかしながら、対馬においては、じつは人口減少よりも高齢化のほうが深刻な問題を引き起こす可能性が高いと考えられます。互助や共助もまずは自助を基本としますが、人間は加齢とともに自立度も低下してくるため、都市部のように核家族化が進行した社会では、老いはリスクになります。そのため対馬は、農山漁村型の人口減少対策と都市型の高齢化対策をミックスした、多角的かつ統合的な政策が求められる、とても稀有な地域であるともいえるのでしょう。

そこで対馬の産業構造の変化を経時的にみてみると、少ないながらも第二次産業が安定した推移をたどっている一方、第一次産業の減少と第三次産業の増加が顕著で、数字の上ではまるで都市部のような構造変化を示していることがわかります。しかし、いまでも対馬は他の地域と比べて第一次産業の占める割合が相対的に大きく、したがって第一次産業が島の主要産業であることに変わりはありません。じつは、実際に対馬を訪問して気づいたことがあります。対馬の人々は――意識的にか無意識的にか――第一次産業を中心に環を描くような高次元産業化の可能性を模索しはじめているのではないか、ということを、島内で出会った多くの人々との意見交換の場で感じたのです。それは、かならずしも第六次産業の定義に囚われるものでもないのです。もし、それが確かであるならば、その選択は正しいと思います。高齢化にともなって、今後は医療、介護、高齢者福祉とその関連サービスへのニーズが高まってくることが予想されますから、まさに第一次産業を中心核として、食、自然エネルギー、そしてケアをパッケージ化した新たな産業の環（「生きる力」を育む新たな産業連関）をつくり出し、高齢になっても、障害を抱えていても、生きがいを持って働くことのできる場を創造していくことが、対馬における「しまづくり」のひとつのテーマになるのだろうと思うからです。そして、人口の社会減に歯止めをかけるためには若い世代の働く場も必要です。とりわけ子育て世代が島内に定住し、安心して暮らしていくためには、医療や教育などに充てる現金収入が、どうしても必要になります。そのためには外部から安定的におカネを引き込み、島内を還流させる仕組みが必要になるのでしょう。行政の知恵と民間の知恵を出し合って、オール対馬で「しまづくり」に取り組むための機会が、すでに到来しているのだろうと思います。

7．おわりに
～パラダイム転換への道筋

対馬における「しまづくり」戦略の先には未知の可能性が潜んでいます。グローバル資本主義のリスクが顕在化しはじめた時代に、世界で最も早く超高齢人口減少社会を迎えることになった日本では、多くの産業がソーシャル・ビジネス化していく必要があるのだろうと考えてきました。本格的な高齢社会が到来すれば、人々の行動範囲や経済活動は少なからず縮小していくことになります。加齢とともに身体は虚弱になりますし、多くの人は収入も減ります。疑いなく、消費に追いまくられる経済とは異なる視点からのアプローチが必要になってきます。それは市場経済の成長ではなく、生活の内実を豊かにするための改革なのだろうと思うのです。

そのためにも対馬では、島内の特定の地域ごとに、継ぎ目なく連結された社会性を帯びた産業のネットワーク、すなわちインテグレーテッド・ソーシャルビジネス・ネットワーク（ISN）（**図３**）が構成され、地域におカネが内部還流する仕組みをつくり出すことが必要なのだろうと思うのです。お互いに切磋琢磨し、競争はするけれども、競争相手の発展と成功も願い、支え合っていけるような、協同の意識に包摂されたネットワークです。そもそも仕事は人間の能力を開花させるための場であり、他者の存在や役割を尊重し、協働の喜びを知り、その結果として、生活に必要な財やサービスをつくり出すことにあります。したがって仕事は、余暇の犠牲を賃金で償うような、機械的な作業ではありません。労働という言葉にこびりついた「苦労と困難」というイメージを「喜びと楽しみ」に代えていく、そのような時代を、わたしたちは作り上げていく必要があります。地域社会という複雑なネットワークに飛び込んで、ともに生きる人々のために、そして地域のために、生活の内実を豊かにするために働く、という活動そのものが、高齢社会における新しい生き方になるのではないかと思うのです。対馬の「しまづくり」には、このようなパラダイム転換への道筋が、ぼんやりと映しだされています。

図３　インテグレーテッド・ソーシャルビジネス・ネットワーク（ISN）